説教20200927テモテへの手紙 二１：８‐１４ 　讃美歌３０３　　21-５３８　３２１　　　　　 　　　 説教　「不滅の命」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

今日の聖書箇所には恥という言葉が２回出てまいります。それは恥じていません、と言うように否定的に語られていますが、その裏返しとして、パウロは、以前福音を恥じていた、恥ずかしく思っていたのだと思います。それはもちろん彼が回心前でファリサイ派であった時のことです。

聖書には恥という言葉が創世記のはじめからヨハネ黙示録に至る迄、まんべんなく出てまいりますが、その中でも一番有名なのは、何と言いましてもロマ書1章16節の「わたしは福音を恥としない」という聖句です。これもパウロの言葉ですが、パウロは相当、恥の意識にとりつかれていたのだと思われます。今日はそのパウロを支配していた恥の意識に焦点を当てながら聖書を解き明かしていきたいと願います。

しかし、聖書を解き明かすのに、恥という観点からの解き明かしはなぜか憚られていて、私は今までにあまり恥についての説教を見聞きしたことがないのです。それはなぜかと考えてみますに、私たちは恥について語ること自体を恥じる傾向があるでしょう。恥について語ることを避けてしまうのです。

ですから、今日の解き明かしがうまくいくかどうか、かなり心もとない状況ではありますが、聖霊お導きを信じて、出来る限り努めて参りたいと願います。

第二次世界大戦中に、アメリカの女性人類学者ルース・ベネディクト氏は、有名な著書「菊と刀」を書いて、米国戦時情報局に提出しました。その著書は後に和訳され、日本人にも広く知られ、影響を与えました。彼女はこの本の中で、日本人の文化は「恥を基調とする文化」であり、他方、欧米人の文化は「罪を基調とする文化」であると紹介しました。こんな話が載っています。ある1人の欧米人が日本で山登りをしたとき、ところどころにゴミや空き缶が捨てられていることがとても気になり、その原因を調べたところ、日本人の心無い登山者が捨てていくことがわかりました。さらに観察してみると、彼らは周りに人がいると絶対にゴミを捨てないのですが、誰もいなくなったことを確かめると、平気でゴミを捨てていくというのです。

この日本人の行動パターンには、世間の目を気にしているということがその根っこにあります。世間の目というのは、日本人社会で暮らしていく上で大変に恐ろしいもので、今回の新型コロナ禍にあって、世間の目の恐ろしさに戦々恐々とされる方も多かったのではないでしょうか。又歴史を遡れば、江戸時代に武士たちが切腹をして自殺をしたのは、いわゆる武士道の美しさとか、仁義を果たすとか言う美談ではなくて、その要因は、ただ世間の目を気にしていたのだとする学説もあり、これは信じてよいかもしれません。

世間の目にさらされ恥を受けるくらいならば死を選んだ方がよい、とするそのエトスは今の私たち日本人が残念ながら受け継いでいることであるかもしれません。

このように恥というのは恐ろしい威力、何か人知を越えた力を発揮するもので、その力が偶像崇拝に向かいますと、私たち人間は大変、縮こまって閉じ込められたような境遇に身を置かざるを得なくなります。

聖書は、恥のあり方を創世記から注意深く記述しています。一番初めに恥が記されるのは創世記2章 25節「人と妻は二人とも裸であったが、恥ずかしがりはしなかった。」です。エデンの園にアダムとイブという二人の人間がつくられ、彼らは、神と向き合って日々暮らしていたでしょう。なぜならばその世界には人間は自分たち二人しかおらず、後は、様々な実をつける木々と、野の獣、空の鳥、家畜がいるだけでした。二人は、自ずと、それら被造物を造られた神の目を気にして生きることになったのではないでしょうか。

そして、この時は未だアダムとイブは罪を犯す前でしたので、二人は、神の御前に、お互いのありのままの裸の姿を恥じるということはなかったのでした。

しかしそれからすぐアダムとイブは神から禁止されていた善悪の木の実を食べるという罪をおかしてしまい、創世記3章7節によりますと「二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした」のでした。

この時の神の御前にある二人の心境を、推し量りますと、それは、神の御前に立っておられない、できれば身を隠したい、しかし、造り主たる神様から離れたくない、離れてしまったら私たちは無になっていまう。だから、せめてこの身を隠しつつ御前に立っていよう、といったような激しい葛藤のうちにあったのではないでしょうか。そしてその葛藤は恥と名づけられ、そしてやがてそれを基に罪の意識が形成されて行ったと考えられます。

そう考えますと、ルース・ベネディクト氏が言った、欧米人の文化である「罪を基調とする文化」の根底にもやはり恥の働きはあるのです。そして、日本人と欧米人の比較ということでいうならば、両者が、誰の前に、誰の目を気にして恥を感じているのかの違いの方が分かりやすいのではないでしょうか。

つまり、日本人は世間の目を気にし、欧米人は神の目を気にしているのです。

次に時代は下りダビデの事を語りますと、詩編６９編はダビデ王が、自らが十字架につけられたような絶体絶命の時に、その心境を、わたしという一人称で語った言葉ですが、 69編 7節（旧約902ページ）「万軍の主、わたしの神よ／あなたに望みをおく人々が／わたしを恥としませんように。」とあります。この言葉は大変深いです。ダビデは神の民の王として神の民を導いておりましたが、想像上かもしれませんが、いつしか十字架に架けられました。そして、その十字架上でパウロは神の民のために主なる神に執り成しの祈りをささげているのです。神の目はダビデを含むすべての神の民に注がれ、全員は、神の目を気にして生きているのです。ダビデは決して自分自身を憐れんで、私を恥としませんようにと祈っているのではなく、私が恥とされる結果惹き起こされる、神の御前におかれる全体の恥について祈っているのだと思います。

旨く説明できませんが、いずれにしても、この詩編６９編のダビデ王の姿は後のイエスキリストの先駆けとなったのです。

次に、ファリサイ派であった時のパウロについて少し見ておきますと、「彼は、なおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、、そしてその道の者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行しようとした」とあります。これは相当鬼気迫る所行ですが、彼は恥を感じてこんなことをしたのではないのでしょうか。彼にとってキリスト者は、神の目の前に恥だったのです。創造主から引き離されるべき存在だったのです。

そのパウロは回心することによって１８０度方向を変えられました。実は神の目の前に恥じるべきは自分自身であって彼らではなかったということです。ですからパウロの「わたしは福音を恥としない」という言葉は大変に重いのです。福音を恥としていたパウロが回心後に、神様の目の前でこのように触れて回るようになったのは、彼の恥の意識がなせる当然の業でもあったのです。

本日の聖書箇所でパウロは「だから、わたしたちの主を証しすることも、わたしが主の囚人であることも恥じてはなりません」といっています。これは神の目の前で恥じてはなりませんということです。但し、少しは人の目を気にしてという意味も含まれているかもしれません。しかし意味合いとしては、神の目の前で恥じないということの方がはるかに深いのです。福音を信じるキリスト者こそ創造主と共にある者たちであるということを言っているのです。ここに神の選びが語れています。主を証しすることを少しも恥じない人こそ選ばれて救われるものたちなのです。そのことを９節でパウロは言葉を換えて、「神がわたしたちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださったのは、わたしたちの行いによるのではなく、御自身の計画と恵みによるのです。この恵みは、永遠の昔にキリスト・イエスにおいてわたしたちのために与えらた。」といっています。

私たちは救われたいと思って、いくら頑張っても救われない時があります。そういう時は、神の計画と恵みを待ちつつ、神の目の前で恥じない生活を送ることがよいでしょう。そうすれば、あなたは主イエス様のまなざしにより近くいることになり、恥じることのない言葉と行いに導かれることでしょう。

神の御前に恥がないパウロには、主なる神から、具体的な役割が次々に与えられました。１１節「この福音のために、わたしは宣教者、使徒、教師に任命されました」とあります。そして、この世にあってパウロはその任務遂行のため多くの苦しみを受けました。しかしその苦しみを受けるということをパウロは恥じないのです。

例えば迫害にあって裸にされて十字架につけられるのは、確かに、世間の目から見れば恥ずかしい事ですが、神の目から見ればそれは逆なのです。

今日見て来たように恥というのは、罪を意識することの前にあることで、私たちは何かを恥じるというとき、それをほとんど本能的な反応のように感じてしまう者です。ですから私たちは自分が持つ恥のあり方をそんなに簡単にコントロールできるものではありません。私たちは、ただ自分が今恥ずかしいと思っていることに恥じ入ってしまうのです。

そんな恥の問題に主なる神イエス様は、解決を与えて下さいました。主なる神は私たちの処に、イエス様を出現され、死を滅ぼして、不滅の命を現わして下さいました。主イエス様はその十字架の上で裸にされて、罪を着せられ、これ以上はないという見た目の恥をおわされました。しかし主なる神の御心に実に忠実に従って十字架に着いたイエス様は、主なる神の目には全く恥ではなく、むしろ栄光であり、不滅の命の現れであったのです。

私たちは、主イエス様の十字架を全く恥じることが出来ません。私たちは全く恥じることなく主イエス様から選ばれて、その不滅の命を共に歩まされているのです。

お祈りいたします

天に居ます私たちの父なる神。今日は私たち兄弟姉妹を御前に集め、共にあなたを礼拝賛美出来ますことに感謝します。

全ての人の造り主であるあなたは、すべての人の父であられます。どうかこのことを全ての国民に教え、あなたの救いを全ての国に知らせてください。

全ての人がこの真理を悟り、信仰をもって心を一つにして平和の内に、正しく歩んでいくことが出来ますように。

あなたは常に私たちを見守り、よいことも悪いことも全てご存知です。又あなたは憐れみに満ち、怒るのに遅い方です。どうか私たちが、そのあなたに寄りすがって、歩んでいくことが出来ますように。

今、病などで悩み苦しみの内にある方々を、愛の御手をもって支えてください。その苦しみを御手に委ね、苦しみを忍び、すべてのことがあい働いて益となる様に導いてください。

私たち人間の思いをはるかに超える、あなたの平和を、私たちに与え、そのうちに私たちが憩うことが出来るようにして下さい。

父と聖霊と共に一体であって世々に生き支配しておられます、私たちの救い主イエスキリストのみ名によって祈り願います。アーメン